
はじまりの恋。

佳那子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はじまりの恋。

【Nコード】

N0923Z

【作者名】

佳那子

【あらすじ】

春野みのり、15歳。初めて知った、恋の痛みと、喜び。

もう人を好きになりたくない、思っていたはずなのに。

プロローグ

「・・・あ、雪！」

修平くんが、空を見上げ、そういう。

その声で私も、修平くんと同じように空を見た。

灰色の曇り空から、はらはらと雪が舞い始めた。

静かに、どこか寂しげに。

・・・今年はじめての、雪だ。

私が手を広げると、手袋をはめている手のひらに、雪たちはぽつぽつと落ちてきた。

白い結晶が融けて、冷たい水滴になった。

そんな私を見ていた修平くんは、静かに微笑む。

そのどこか寂しげな笑みに、私の心は奥のほうから徐々に冷えていく。

「・・・みのり。」

「・・・なに？ 修平くん」

・・・そんな笑顔見せないでよ。
声に出さなくても伝わってくる。

修平くんからはすうっと、笑顔が消えた。

「・・・俺、好きな子ができた」

「だから、別れてほしい」

・・・ほら。

わかってたよ。

頬が冷たいのは、降り始めた雪のせいなのか。
私の涙なのか。

霞んで見えはじめる修平くんの顔。
そのとき、ふと思った。

修平くんって、雪みたいだな。

・・・こうやって、私の心をひきつけておいて。

・
・
・
すぐ、消えちゃうの。

1. 終わりの恋。

ざわざわ、ざわざわ。

受験が終わった後の、クラスの解放感はもの凄い。
それは私のクラスも同じだった。

「みのり、ついに明日だね！合格発表！」

「亜由・・・うん、そうだね」

「自信あり？」

「まさか！」

私がそう言ったと同時に、亜由は笑った。

私もあはは、と笑った。

受験直後にも、亜由に言ったけど、数学はダメダメだった。
面接だって、おどおどしちゃって、何も言えてない。

・・・って、笑ってる場合じゃないよ・・・私・・・。

「・・・みのり」

「ん？」

「大丈夫？」

「なにが？後期試験が？」

「とぼけてんじゃないっつの。・・・修平のこと」

亜由は、真剣な顔でそう言ってくれた。

思考が一瞬停止したけど、何とか笑顔は保てた。

「・・・べつに。いちいち気にしてないよ」

・・・私の強がりには、いつも亜由は気がついている。

「・・・そっか。そうだよみのり！高校にはもっといい男いるんだからね！」

「だ、だよね！」

「うちら頑張ろう！あんた、修平なんかよりいい奴、見つけなよ！」
「うん・・・」

だけど、それ以上追求しない亜由には、いつも救われる。

「ちょっとトイレ」

「オッケー」

私は席を立ち、廊下に出た。

☆

・・・廊下に出ると、教室よりもっと賑やか。

いろんなクラスの子が集まって、おしゃべりしている。

私はふと、壁際に立っている一組のカップルに目がいった。

「もうー、修平ってばー！」
「俺！？なんで！」

・・・修平くん。
笑ってる。
幸せそう。

また心が、キリキリと痛んだ。

私は二人から目を背け、トイレへと急いだ。

・・・振られた。

私は、修平くんに振られたんだ。
よりによって、私の受験前日に。
自分が私立の推薦で、通っちゃってるからって。

『好きな子ができた』

なによ、なによそれ。

今では、その『好きな子』とちゃっかり付き合っている。

ずっとそばにいてくれるって、言ったのにね。

修平くんが、私のすべてだったのに。

・・・裏切られたんだ、私。

大好きだった人に。

☆

翌日。

私は学校が終わったと同時に、亜由と一緒に教室を飛び出した。

「みのりっはやく！合格発表、もうされてるよ！」

「待ってよ亜由ー！」

亜由の速い足に感心しながらも、自分の足の遅さを憎む。

靴を履いて、校舎内を出た。

学校の自転車置き場に、自分の自転車を見つけて飛び乗る。

亜由と一緒に校門を出て、目的地の『大江第一高等学校』まで、向かった。

☆

「うっわあー！すごい人！」

「ほんとだ・・・」

自転車に飛び乗って、約15分。
私たちが受験した高校の、正門玄関にはたくさんの人ばかり。

「こ、こんなんでも合格見ろって言われてもわかんないよ!」

「がんばろみのり!行くよ」

「えっ、ちよっと亜由!」

亜由は勢いでその人だかりに突進した。

私も、受験番号を持った手を握り締めて、覚悟を決め、その中に混じろうとした。

・・・が、失敗。

トロくて鈍臭い私は、人にぶつかって、その勢いで人だかりからはじかれた。
べちゃっと、地べたに叩き付けられた。

「い、痛い・・・、もう、最悪・・・」

立ち上がり、スカートを払う。

さあ、もう一度。

・・・そう思ったとき、受験番号の紙が手元にないことに気がついた。

「え・・・」

嘘！？

嘘、嘘！？

その紙は、もし合格した時に入学書類と共に送らないといけない。
なくしちゃったら、入学できない・・・。

ない、ない。

地べたに這いつくばって探す。
ない、ない、ない！

目頭が熱くなる。

どうしよう・・・紙、なくなっちゃった・・・。

修平くん・・・！

「ねえ、あんたの探しものってこれ？」

「へ・・・？」

突然頭上から降る声。

私は驚いて顔を上げた。

そこには、一人の男の子。

・・・中学生だ。

手には、私の・・・受験番号の紙を、持っている。

「そ、それ・・・!!」

「こんな大事なもんなくすなよ・・・ほら」

「あ、ありがとう・・・」

紙を受け取る。

手につい力が入って、くしゃくしゃに握りしめてしまった。
涙がぼたぼたと、落ちる。

「よ、よかった・・・本当に・・・ありがとう!」

「いーえ。んじゃ」

興味なさそうに、そう言葉を残し、その男の子は去って行った。

・・・ありがとう・・・本当に・・・。

「みのりー!! あった!! あったよ!! うちら二人ともあった!!」

亜由の声が、聞こえる。

「え・・・ほんとう!?!」

「あった、合格したー!!」

亜由と抱きしめ合い、とびはねる。

それと同時に、さっきの男の子に心から感謝した。

「よかったよー、ほんと・・・」

「これで、うちら春からここの高校の一年生だよ！」
「うん・・・」

指先で涙をぬぐい、亜由と微笑む。

「頑張ったもんね」

「うん」

「みのり・・・」

「・・・うん」

これで蹴りがついた。

さよなら、修平くん。

そうすぐには、忘れられないだろうけど。

決めていたから。

修平くんと受けた私立には滑っちゃったけど、今回は合格したんだ。

これで本当に、修平くんとは・・・。

2月の終わり。

卒業式は、すぐ目前だ。

修平くんとはもう、進む道も別々だから。

私も、前へ進んでみるよ。

2. さくら。

それからの日々は、あまりにも早く過ぎ去った。

ほとんどの子が志望校に受かって、もう心配事はなくなったから。今までの中学生生活を振り返ることは、卒業式直前までしなかった。

・・・雪から、桜にバトンタッチ。

季節は確実に、変化している。

3月上旬。

私は、無事卒業式を迎えることができた。

『・・・春野みのり！』

「はい！」

マイクを通した担任の声。

返事をして席を立ち、壇上に上がって校長先生から卒業証書をもろう。

ああ、入学したことが、つい最近のことのよう。

そんなことを考えながら、卒業証書を受け取った。

証書には、達筆な字で私の名前が書いてある。

それを見ると、なんだかくすぐったいような、不思議な感覚に陥った。

私たちのクラス、3年3組が終わると、次は4組。

『東修平!』

「はい」

その名前と、声を聞いただけで、肩がびくっと跳ね上がった。

☆

・・・長くて淡々とした式が終わり、教室へと戻り、先生の言葉をもらう。

涙ぐみながらも、最後のクラス写真を撮ったりして、別れの時を過ごした。

「みのり!写真撮ろう!」

「うん」

亜由は自分の携帯を手にもって、私の隣に並ぶ。

2、3枚撮って、それから皆で思い出づくりに卒業の歌を歌って、校舎を後にした。

☆

「あー、中学生生活終わったー・・・」

「ねー。」

「みのり、高校からもよろしくね」

正門。

桜の花びらが、地面を絨毯のように、敷き詰めている。

卒業証書の筒を持って、私と亜由は話していた。

「ええ、こちらこそ！」

「みのり、やばいとか言いながら合格したし、安心したよ」

「あはは・・・」

奇跡だよ、そう付け足した。

だって、私と亜由が受けた高校は、県内の公立高校でもN O . 1を
争う学校だから。

必死になって勉強して、よかった。

私立落ちたときは、絶望したけどね。

「あ・・・」

「え？」

亜由がふと、私の肩越しを見る。

「・・・亜由、どうしたの？」

「あ、なんでもない」

「なに？」

私は気になって、振り返った。

・・・見なきゃよかった。
すぐ後悔。

「み、みのり・・・」
「・・・」

そこには、修平くんと・・・今の修平くんの彼女、佐々木美幸ちゃん
がいた。
美男美女。
お似合いだ。

ふたりとも、同じ高校に進学する。

こんな場面、見慣れたはずなのに。

諦めたはずなのに、何でまだこんな気持ちになるんだろう？

修平くんは、自分の学ランの第2ボタンをとって、美幸ちゃんに渡した。

美幸ちゃんは嬉しそうに、それを受け取った。

「・・・みのり」
「うん、わかってる」

あの日々の私たちはもういないんだって。

今にも折れてしまいそうだったあの時の私を、支えてくれた修平くん……。

ありがとう。

最後に、心には修平くんを、修平くんだけを焼き付けた。

「……行こうか、亜由」

「……うん」

「よっしゃ、みのり、卒業プリ撮るぞー！これからゲーセン直行ー
！！」

「おー！」

私と亜由は笑って、正門を抜けた。

振り返りはしなかった。

まっ青な空。

強い風が吹いて、ピンクの花びらが青い空を彩った。

3. 私の家族。

自分の部屋で、全身が映る鏡を見ながら、真新しい制服に身を包む。
セーラー服。

中学はブレザーだったから、なんだか新鮮。
胸元のスカーフを正し、靴下を履いて、完璧。

「わぁー！私、結構いけるんじゃない？」

「うるさいなあ、みのり！調子乗るな」

「え、ご、ごめん亜希ちゃん・・・」

私が無意識に声に出してそう言っていると、同室の山本亜希がその声を張った。

二段ベットの一番下で、しかめ面をしながら雑誌を読んでいる。

私より、一つ年下。

今年で中学三年生。

不良っぽくて、ちょっと怖い感じだけど、本当は誰よりも優しいんだ。

「ね、ね、亜希ちゃん、私どう思う？制服似合う？」

「は？別に、誰もあんたのこと興味ないから」

「ひ、ひどい・・・」

部屋を出て、リビングに向かう。
もう朝食が出されていた。

「おはようございまーす」

「あ、おはようみのりちゃん！制服似合ってるねー」

「ありがとう、高橋さん」

調理担当の高橋さん。

四十手前の、人柄の良い、ここの職員さん。

「みのりおねえちゃん、かわいいー」

「まあ、似合ってるんじゃないの」

「ほんとー？ありがとう柚子ちゃん、ケンくん」

兄妹の、城田ケンくんと柚子ちゃん。

柚子ちゃんはまだ三歳。

ケンくんは、小学五年生。

「あら、もう皆集まってるの？」

「園長先生！おはようございます」

少し遅れて入ってきたのが、ここの施設の園長、山田由起子先生。

「あら、みのりちゃん、何だかその制服着てると、お姉さんになった感じね」

「へへ・・・」

少し照れながら、自分の席へと着く。

「まだ降りてきていないのは？」

「篤人くんと蒼くんと、亜希ちゃんです」

「まったく、あの二人は・・・」

園長先生がそう言ったと同時に、男の子二人が降りてきた。

・・・けだるそうに入ってきたのが、今年で高校二年生になる、二宮篤人くん。

中学二年生の竹下蒼くん・・・。

そして続いて、スウェットのままの亜希ちゃんが入ってきた。

「篤人くんも蒼くんも、昨日いつ帰ったの？」

「うっせえな、いつ帰ってこようが勝手だろ」

「・・・門限は夜9時までですよ。守ってもらわないと困ります」

・・・重苦しい雰囲気に包まれた。

朝はいつも皆で食べる。

はつきり言っちゃうと、居心地が悪い。

でも、それはここのルール。

これだけは絶対破っちゃいけないんだ。

それは、この・・・『青空の家』にいる皆なら、わかっている。

高橋さんがそれぞれのお茶を注ぎ終わったあと、園長先生の言葉で皆食べ始めた。

「それでは、いただきます」

「いただきます！」

元気よく挨拶したのは私と柚子ちゃんと、高橋さんだけ。
皆何も話さず、黙々と食べ始めた。

『青空の家』

それが、この孤児院・・・施設の名称。
未亡人の園長先生が、自宅で開いている。
ここにいる子たちは、親に捨てられたり、身寄りのない子が集ま
っている。

今のメンバーは、柚子ちゃん、ケンくん、蒼くん、亜希ちゃん、私、
篤人くんの六人。
仲が良いとは決して言い難いけど、だけどお互いを家族として、意
識しようとはしている。

私は、三年前・・・中学一年生のときにここへ連れて来られた。
その時は悲しくて辛くて、どうしようもなかったけど、この雰囲気
に、少しずつ救われていったんだ。

篤人くんが半分以上も残し、先に席を立つ。

蒼くんは食べ盛りで、全部食べてからさっさと自分の部屋へと戻る。

・・・少し、寂しさを覚えながら私も食べ終えた。

「それじゃあ、私、そろそろ出ないと・・・」
時計を確認して、そう告げる。

「あ、ちょっと待って、みのりちゃん」
園長先生はそういう、席を立て、縦長の箱を持って、私のもとへ
と来る。

「はい、これ、ここにいる皆からのプレゼント」
「えっ……」

園長先生は優しく微笑みながら、私に手渡す。
驚きながらも、受け取り、箱をあける。

・・・茶色い革の、腕時計。
見るからに高級そう。

「こ、これ……こんなの……」

「私と高橋さん、ケンくん、蒼くん、亜希ちゃん、篤人くんから。
皆でお金を出して買ったのよ」

「……」

「受け取って。入学祝いよ。いつでも身につけておいてね」
「……あ……ありがと……」

胸が熱くなって、なんだか言葉にできなくなった。
そんな私を見て、亜希ちゃんはニヤニヤしている。
恥ずかしくなって、顔を伏せた。

「みのりおねえちゃん、これ、ゆずからの！」

「柚子ちゃん……」

私のスカートの裾を掴んで、柚子ちゃんが私に笑いかける。
手には画用紙を持っている。

私はしゃがんで、それを受け取る。

「おねえちゃんのがおえ！」

「……上手だね。ありがとう」

似顔絵とは到底言えないけど、柚子ちゃんの想いが画用紙から溢れ出ている。

柚子ちゃんを抱きしめる。

柚子ちゃんは声をあげて、笑った。

あと二年。

ここにいる子は、高校を卒業・・・十八になったら、この施設を出ないといけない。

それまで、私は皆に何が出来るだろう。

「・・・ありがとうございます」

「いいえ。ほら、もう出ないと。入学式、始まっちゃいますよ」

「わあっ、ほんとだ！　いつてきます！」

「いつてらっしゃい！」

時計を腕に巻き付けて、慌ただしく家を出た。

これから亜由の家に迎えにいつて、いざ、入学式へ。

4. 出会い。

「おはようみのりー！一昨日ぶり！」

「おはよう、亜由」

私と同じセーラー服を身につけて、元気よく亜由が登場した。

亜由とは、春休み中ずっと一緒に遊んでいた。

一昨日会ったばかりだけど、なんだか違う制服を着ているせいかな新鮮。

そして、亜由と同時に、亜由のお母さんが出てきた。
手にはカメラを抱えて。

「おはよう、みのりちゃん」

「おはようございます」

優しい笑顔。

その笑顔はどことなく、亜由に似ている。

私はお辞儀して、挨拶した。

「高校入学の記念に、二人の写真撮りたいの。撮ってもいいかしら？」

「勿論です」

「あ、ママ、あたしの携帯でも撮ってよ」

「はいはい」

亜由ん家の、庭の桜の木の下に並ぶ。

お互いの肩を取り合って、一枚ぱしゃり。

そして亜由の携帯でも、一枚。

次は私が、亜由と亜由のお母さんの写真を撮った。

レンズ越しに見る二人の顔。

・・・ああ、やっぱり亜由は母親似だ。

「ありがとう、みのりちゃん」

「いいえ。ありがとうございました」

カメラを戻し、亜由の家を出た。

「みのり・・・」

「ん？」

「なんか・・・ごめんね」

「・・・なにが？ いちいちそんな、気使わないでよね！」

笑って、亜由の背中を一発叩いた。

・・・何とも思わなかったっていうのは、嘘になる。

☆

大江第一高校。

合格発表後の、新入生説明会以来の建物。

さすが大江高校。

行き交う先輩やら、新入生がみんな頭が良さそうに見える。
なんだか私が、いちばんポケッとしてそうだ・・・。

クラス表を見に、亜由と新入生の正門玄関へ。
たくさんの人だから。
中々見えない。

人混みをかき分けてから、私と亜由はようやくクラス表が貼ってある前へときた。

「わぁ～なんか緊張する!」

「私も!」

「みのり、あんた一組から見ても!」

「わ、わかった・・・」

私が一組、亜由が最後の八組から見るようになった。
えーっと・・・。

「あ・・・」

「え?」

亜由が最初に声をあげた。

「みのり、あったよ」

「嘘! 私、八組!」

「『春野みのり』・・・私の名前はない」

・・・絶望。

☆

『隅田亜由』の名前があったのは、私が見た一組だった。

よりによつて、隣のクラスどころではない。

一組と八組・・・大分離れてしまった。

教室も三階と四階にわかれている。

私が三階だ。

・・・泣きたい。

同じ中学の女子ひとりもないし。

亜由は『大丈夫』って言うてくれたけど・・・。

私は亜由みたく、性格明るくないしコミュニケーション力もない。
友達できるとは思えない！！

勝手に涙が溢れてくる。

亜由・・・亜由・・・。

幼稚園のときからずっと一緒だったのに、ついに離ればなれになっ
ちやう時がきたんだね・・・。

大げさと思いながらも、泣けてしまつてしかたない。

一年八組の教室。

私の心と同じ、重たい横開きのドアを開け、入った・・・。

☆

・・・ちよつと、ちよつと、ちよつと。

女子ってなんで、あんな群れるの早いの!?

さっそくグループできちゃってるところもあるしさ・・・。

私は教室の中央の席（出席番号順）で、一人でいた。

なにもすることがない。

きつい・・・きついよ。

これじゃあ早く誰かに話しかけないと手おくれになっちゃう・・・。

だけど、一通りまわりを見回しても、取り残されてるのは私くらい。

・・・あ、隅の席に女子がいる。

。だけどなんだか、アニメ雑誌を見てニヤニヤしていて、不気味・・・。

ど、どうしよう!

「おーい、そろったかー。席着け」

救世主!

このクラスの担任の先生らしき人が入ってきて、皆席に着いた。

私の前、後ろ、左隣は男子・・・。

右隣は初日から遅刻か、誰もいない。

亜由・・・最悪です。

「はい、入学おめでとうございます。ここの担当主任の松村秀雄です。歳は四十。奥さんも子供もいます。一年間よろしくなー」

先生の自己紹介を一通り聞く。

すると次は、私たち生徒の番になった。

私・・・自己紹介とか一番苦手なのに。

皆ウケを取ったり、なんてことない風に淡々とこなしていく。
やばい、緊張してきた・・・。

ついに私の前の人が終わった。

うわぁ、なんて言ったらいいんだろう!？

「はい、じゃあ次ー。」

吐き気に近いものを催しながら、震える足で椅子から立ったその時・
・。

重たい横開きのドアが開いた。

「・・・おい、入学初日から遅刻かー」

「すみません」

「名前は」

「松坂博喜です」

「おい、嘘つけ!俺はいるだろーが!」

どっと、笑いが起こった。

え、え、なに・・・。

突然入ってきた男子・・・。

あれ・・・？

なんか、どっかで見たことある・・・。

「えーっと、永瀬遥斗か。遅れた理由は？」

「それなんすけど、登校中道端でばーちゃんが倒れてて」

「もういい、さっさ席着け」

また、笑いが起こる。

その男子は、私の空いていた右隣の席に着た・・・。

え、まさか・・・隣？

ていうか、本当にどっかで・・・。

『こんな大事なもんなくすなよ』

あ・・・。

「あー！」

「な、ど、どうした春野！」

「あ、す、すみません・・・。」

つい、声を出してしまった。

くすくすと笑い声が聞こえる。

隣の人はびっくりしている。

思いがけないところで注目されちゃって、赤面。ぼそぼそと自己紹介を終えて、席に着いた。

恥ずかしかった・・・。

・・・ていうか、隣の人にお礼、言ったほうがいいよね・・・。

皆の自己紹介が終わって、先生が教室を出た。

それと同時に、皆席を立ち、また話し始める。

・・・今しかない。

私は意を決して、話しかけた。

「ね・・・ねえ！」

「？」

隣の人は怪訝そうな顔をして、こっちを見た。

・・・私、今、一生分の勇気を使ってるのかも。

「あの、合格発表の時・・・私の受験番号の紙、拾ってくれた人だよね？あ、ありがとう・・・。私、本当に、あの時助かって・・・」

私が一息でそう言うところ。。。

「おい遥斗。その子、知り合いかよ？」

「。。。。全然。」

。。。。え？

遥斗と呼ばれたその人は、席を立ち、友達とどこかへ行ってしまった。

。。。私は、自分の机に突っ伏した。

最悪だ。

最悪、最悪、最悪だ。

恥ずかしい。

何やってんだろう、私。

でも、あの人・・・。

絶対、あのとき紙を拾ってくれた人だった。

・・・似た人でもいるのかな。

だけどいまの私は、他のことは考えられなかった。

ただただ、恥ずかしかった。

私は、気づいていなかった。

・・・この出会いが、私の運命を変えるだなんて・・・。

5. 新しい仲間。

・・・入学式。

教室前の廊下に、出席番号順に整列して、体育館へと入場。

吹奏楽部が奏でる音楽に合わせて、用意されたパイプ椅子へと座る。

そして、卒業式程ではないけれど、長くて淡々とした式がひとつずつ終わっていく。

新入生の名簿を一人ひとり読み上げ、校長先生の話、PTA会長の話・・・。

つい、あくびが出てしまう。

『新入生代表挨拶』

その言葉で、周りは一気に異様な空気を醸し出した。

皆ちらちらと辺りを見回したり、隣の子と喋ったりする。

たしかに、代表挨拶って、入試トップの子がやるから気になるかも・・・。

特に大江高校でのトップって、どんな人なんだろう。

まあ、もちろん私なんか、論外だけど。

『新入生代表・・・』

『一年八組、永瀬遥斗!』

「はい」

・・・嘘・・・。

私たちのクラスから・・・？

しかも、あの人・・・。

ながせ、はるとくん。

私は、永瀬くんが義務的に読み上げる式辞を、ただボーッと聞いていた。

☆

入学式が終わり、教室へと戻る。

先生はまだ来ていない。

当然おしゃべりタイムが始まる。

私の隣・・・永瀬くんの席には、人が集まってくる。

私、完璧邪魔だよね。

・・・何してよう・・・。

「ねえ、その、遙斗の隣の子！こっちきて一緒に喋ろうよー！」

・・・遙斗の隣？

遙斗って、永瀬くんのことだね。

永瀬くんの隣・・・私？

私は、声が聞こえる方向を見た。

窓側の一番前の席で、女子二人組がニコニコしながら、こっちを見ている。

え、私？

わかんなくて、首をかしげてみたら、あははっと笑って、二人が頷いてくれた。

・・・おそろおそろ、二人に近づいていってみる。
すると二人は、優しく私を迎えてくれた。

「ねえねえ、一人？どこ中？」

「あ・・・旭中」

「旭かー。このクラスにはいないね。寂しいんじゃない？」

積極的に話しかけてくれる。

嬉しい。

「うん・・・友達と離れちゃって・・・」

「そっかー。あ、君なにちゃん？」

「みのり。春野みのり」

「みのり？可愛い名前じゃん。あたし山崎優香！で、こっちのメガネちゃんが・・・」

「奥田直子。よろしく。みのりって呼んでいい？」

「え、もちろん！」

「じゃあ、直子って呼び捨てにしているから」

「あたしも優香でいいよーよろしく！」

背がちっちゃくて、髪型がボブなのが優香。

色白で、スラっとしている黒髪ロングのメガネちゃんが、直子。

・・・亜由。

私、友達・・・できたかもしれない。

「うん・・・よろしく、二人とも・・・」

「おーい、席着けー」

私がそう言ったと同時に、先生が入ってきて、席に着いた。

☆

学級会が終わり、放課。

明日からさっそく授業が始まるらしい。

荷物をまとめ、帰り仕度をする。

「みのりー！あたしらと一緒に帰らない？」

「優香、直子！うん、いいよ」

優香と直子が、当たり前のように声をかけてくれた。

「あ、あの、私の友達も一緒にいい？」

「うん、全然いいよ」

「いこ」

三人で教室を出た。

そして、階段のそばで亜由を待つ。

上の階から集団が降りてくる。

その中に亜由もいた。

亜由はさっそく、たくさん友達ができたらしく、五人グループの中から脱線して私たちに駆け寄ってきた。

「おうみのり！そっちの子たちはお友達？」

「うん、そう。優香と直子。で、この子が亜由」

「よろしく」

「よろしくー！」

威勢のいい亜由。

「亜由ー、また明日ねー」

「うん、ばいばーい」

派手め女子グループに、亜由は手を振った。

「亜由、さっそくいっぱい友達できたんだね」

「まあねー。それよりあんたが一番心配だったんだからね。でも・・・
・優香ちゃん直子ちゃん、みのりと仲良くしてたげてね」

「ちよつと亜由！」

私が顔をまっ赤にしてそういうと、優香と直子は笑った。

☆

四人で学校を出る。

本当よかったな。

入学初日に友達できて。

「そういえば、みのりと亜由ちゃんは部活なんか入るの？」

「へ、部活？」

優香のその問いに、私と亜由はぽかんとする。

「部活入る子は、今日から体験入部できるんだよ」

「へー、そうなんだ・・・優香と直子は決めてるの？」

「私、吹奏楽」

「あたしもー。明日体験入部してくる」

直子と優香は吹奏楽部か。

どうしよう、私も何か入ったほうがいいのかな？

でも部活とか入ったら、部費とかかかりそうだし・・・。

「亜由は？なんか入ったり・・・」

「するわけ！家直行」

・・・亜由はそういう奴だった。

もちろん、私と亜由は中学から帰宅。

「私も部活は入らないかな・・・」

「えー。もったいなーい、せっかくの高校生ライフをエンジョイし

ないと!」

「エンジョイって、優香あんた・・・」

直子のツツコミに皆で一斉に大笑いして、その日は別れた。

☆

『青空の家』に帰る。

家の中からは、今晚の夕食のメニュー・・・カレーの匂いが漂っていた。

「みのりちゃん、おかえりー」

「ただいま、高橋さん」

高橋さんがひょっこり、調理場から顔を出してくれた。

「どうだった? 学校は。友達できた? あ、カレー味見する?」

「いただきます。・・・まあ、最初ちょっと焦っちゃったりしたんですけど、なんとか」

笑いながら、カレーのルーを小皿にとって、食べてみる。

・・・美味しい。

「そう。よかったわね」

「はい」

そんな話をしていると、また誰かが帰ってきた。

・・・が、鞆を投げ置いた音がただけで、また玄関の扉が閉まっ

た。

「・・・まったく、篤人くんも困ったものね。いつも何処ほつつき歩いているのかしら」

高橋さんはそういい、カレーをおたまでかき混ぜた。

さっきの音の正体は、篤人くん。

毎日何処かへ行っては朝方帰ってきて、ほとんどこの家にはいない。篤人くんは、五歳の頃からここにいらしい。

篤人くんは何だか、孤児院で育った、典型的な例の人のような気がする。

「・・・」

「ほら、みのりちゃんもはやく着替えて。リビングで柚子ちゃんが退屈そうにしてたよ」

「あ、はい・・・」

それから私は、部屋着に着替えたあと柚子ちゃんの所へと行き、お絵描きをしたりして、一緒に遊んでいた。

そして夕飯を食べ、お風呂に入り、明日のために夜11時には眠りについた。

6. 永瀬くん。

朝。

仕度を終え、家を出、昨日のように亜由を迎えに行った。
そして、亜由と一緒に学校へと向かった。

☆

亜由と別れ、自分のクラスへ。
教室に入った途端に、本鈴のチャイムが鳴った。

「みのりー、おはよう」

「おはよう」

「優香、直子！おはよー」

優香と直子に挨拶して、自分の席へと着く。
すぐに先生が入ってきた。

「席着けー。学級会始めるぞ」

そして、出席をとりはじめた。

「来てないのは永瀬かー」

・・・また？

私は右隣の席を見る。

そこにいるはずの永瀬くんの姿がない。

「まあ、あいつの事は放っておこう。それじゃ、今日の日程いーぞ」

今日は1限から6限、しっかり授業があるらしい。
机から、まだ硬くて真新しい教科書を取り出す。

さすが、大江高校。

選ぶ教科書のレベルはかなり高度。

いまの私じゃ、まったくわからない。

「えーっと、ここで、このクラスの学級委員を決めたいと思う」

先生のその声で、ざわざわとなった。

いやだー、めんどくさいー。

そういう声上がる。

私も嫌だ。

あんまり目立ちたくないし・・・。

「1年間やってもらうぞ。ざつよ・・・責任のある立派な仕事だから、立候補でいくか。男女一人ずつな」

いま先生、『雑用』って言いかけたよね。

それを察して、誰も手をあげない。

「いないのか？困ったな、じゃあ出席番号1番・・・」

「げえっ！」

1番の子が声をあげた。

それを見て先生がニヤリ、と笑った。

「1番に、30を足して31番、春野！」

・・・は？

「おまえ女子の学級委員な」

ちょ・・・ちょ・・・。

ちょっと待てっ!!!

☆

『春野、そんな嫌そうな顔すんなって。オレはそんなに雑用とか押し付けたりしないから』

『え？なんで31番なのかって？オレの誕生月に誕生日を足したんだ。1月30日だから覚えとけよ。31番になった奴の宿命だ』

『女子は決まったし、次は男子か。・・・遅刻魔の永瀬でいくか』

・・・あんな先生だとは思わなかった。

「みのり、どんまーいっ!」

「あの担任、かなり適当だね・・・」

「優香・・・直子・・・最悪だよ・・・」

休み時間。

私は机に突っ伏して泣いた。

それを優香と直子が慰めてくれた。

「まあまあ、遥斗と同じ委員になったんだから、喜んどけ!」

「・・・永瀬くんがなに?」

「え、遥斗かつこいいじゃん!イケメンと同じ委員できるなんて羨ましいんですけど」

「じゃあ優香、私とかわって」

「学級委員じゃなかったら、かわってあげても良かったんだけどな」
「なにそれ・・・っていうか」

今まで気になったことを聞く。

「優香たち、永瀬くんのこと呼び捨てしてるけど・・・」

「あ、私たちと遙斗、同じ中学なの」

「え、そうなの？」

「うん」

直子はそう答えた。

直子と優香は・・・南中か。

「仲良いんだ？」

「普通だよ。三年のとき同じクラスになって、呼び捨てで呼び合う
仲なだけ。まあ、優香は・・・」

「そう、遙斗のこと好きなんだよねー」

口に手をあて、ふふ、と笑う優香。

「え、そうなんだ！」

「うん！」

「高校でも同じクラスって、すごいね」

「でしょ！？運命でしょ！？」

「それくらいで運命っていうんなら、私も遙斗と同じクラスになっ
ただけど？」

「ちよっと直子！」

さっきの嫌な気持ちも忘れて、思いっきり笑った。

「あ、そういえばみのり、メアド教えてよ」

「あ、私も」

「え・・・」

二人は素晴らしい、携帯をすばやく取り出した。

・・・私、携帯・・・持っていない。

「みのり？」

「ごめん、私・・・携帯持っていないんだよね」

「え・・・まじ？」

優香は、びっくりしたような顔をした。

「珍しいね。買ってもらわないの？」

「不便じゃない？」

「欲しいとは思っただけだね・・・」

あ・・・なんか今、一気に二人のテンション下げちゃったような・・・。

そう思ったとき、チャイムが鳴った。

「じゃあ、買った時に言ってね」

素晴らしい二人は席に着いた。

・・・携帯かあ。

周りを見回しても、私以外のほぼ全員、持っている。
授業の始まりのチャイムが鳴っても、いじってる人もいる。

私は、欲しいけど買えないんだ。

同じ年代の子がほぼ全員所持していると聞いたときは、本当に羨ましかったし、なんだか自分だけ皆から切り離されたようで寂しかった。けれどいまはもう、諦めている。
保護者の契約がいらなくなつて、自分で料金が払えるようになった時に買うんだ。

☆

3限の生物が終わったあと、生物担当兼私たちの担任、松村先生が、ダンボールに教材を抱えて、それを私に押し付けてきた。

「え、なんですか？」

「これ、生物室まで持っていってくれ」

・・・なんですと？

反論できない性格の私を知ってるのか、もともと図々しいのか、重たいダンボールを私に預けた先生は、

「生物室はこの階の一階だから、よろしくな」
それだけいい、さっさと教室を出て行った。

☆

教育委員会に訴えたい・・・。

よろよろと階段をおり、重たいダンボールを何度も床に降ろしながら、やっとこ生物室の前までつく。

あ・・・そういえば、鍵とかいるんじゃないの、これ！？

そうだったら、本気で先生をPTAやらに訴えちゃうから。扉を開く。

・・・開いた。

淡い期待はあっさりと散った。しぶしぶ中に入る。

・・・そこには・・・。

「・・・え？」

「・・・あ」

・・・同じクラスの、永瀬くんがいた。

☆

「・・・何してるの？」

意を決して、メダカが飼育されている水槽に手を突っ込んでいる永瀬くん、そう問う。

「検温」

「なんでそんなこと・・・」

「生物部に入ったから」

そういい、水温をチェックしてから、永瀬くんは紙になにかをサラサラと書いていた。

「ていうか、あんた同じクラス？どっかで見たこと・・・」

「隣の席なんですけど・・・」

「・・・あ！はいはい、あの時のね」

私、印象薄いつてよく言われるから別にいいけど・・・。

「で、何しにきた？」

「委員長だから先生に雑用任されてるの」

「うわー、お疲れ様」

「いっとくけど、永瀬くんもそうだから！」

「え？」

私はそういい、先生の実験台に教材を置いた。

・・・ていうか、私、初会話なのにしゃべれてるんだけど・・・。
普段、修平くん以外の男の子の前になると、おどおどして喋れないのに・・・。

「・・・プリント落ちたけど」
「え？」

永瀬くんはそういい、生物のプリントを拾ってくれた。

「あ、ありがと・・・」

「あんた、よくそんなひらひらしたもん落とすよな。・・・受験番号票とか」

「そ、そうなんだよね・・・気をつける・・・って、え？」

・・・。

「・・・覚えてるじゃない!!」

「あの後、よく思い出してみたら、ああ!あの時のにつぶい女かって思い出して!」

「ひど・・・私、あの時すごい恥ずかしい思いして・・・」

顔をまっ赤にして、そういう私。

ていうか、『につぶい』って何？

こういう事いう、男の子って昔っから、特に苦手。

もう嫌だ。

生物室を出ようと、小走りに扉のほうへむかう。

「・・・春野」

・・・え・・・。

・・・私の名前・・・。

「またあとでな」

そういい、再びメダカのほうに目をうつす。

「・・・永瀬くんは？いつ来たの？・・・今からでも、授業出ないの？」

「さっき来たばかり。気が向かないから、5限から出る。・・・それに、人間に囲まれてるより、魚とか水草とか、小動物に囲まれてるほうが楽し」

抑揚のない声で、そういった。

・・・変な人。

いろんな意味で。

私は生物室を出て、教室へと戻った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0923z/>

はじまりの恋。

2011年12月10日18時57分発行